レインリリー

現　みか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レインリリー

【Ｎコード】
Ｎ８２９４Ｘ

【作者名】
現　みか

【あらすじ】
お母さんの治療の為、田舎に越してきた丘上小椋。
そこで一人の少年と出会う。
初恋は涙の味。

黄金の出会い（前書き）

小説初投稿になります。
至らない箇所も多々あると思いますので温かい眼で見ていただけると嬉しいです。

黄金の出会い

「重い…」

私はそう一人呟いて、首筋を伝っていく汗を拭った。

こんな事ならズボンを履いてこれば良かった。私はそう思わずにいられない。せっかくだからとお気に入りのワンピースを着てきたのだけれどさすがに動きづらいし、汗をかいているせいで足にまとわりついてきて気持ち悪い。大体お母さんも電車が一本も走ってなくて、最寄り駅から徒歩何十分ってかかる場所なら事前に言っておくべきじゃ無いのかなぁ？なんて、普段はしない悪口がふと、頭をよぎった。

右手に持った重い鞄を恨めしそうに見る。「はぁ…」今日何度目かのため息をついて前を見ると、ゆるやかな坂道になっていた。その、頂上あたりにここからでも見えるほど、大きな樹が一本生えていてので、私は少し休ませてもらおうと思い、残りわずかな力を振り絞って鞄を持ち上げノロノロと歩き出す。

右手に握ったままの地図はお母さんお手製のもので（途中からしか書かれてないけどね…）、お母さんが入院していた頃では考えられないことだから、さっきの悪口なんて忘れてフッと柄にでもない微笑を浮かべてしまう。地図を失くさないように鞄についている小さなポケットの中に突っ込む。そうこうしている間に樹の元にたどり着いた。どさっと大きな音を立てて鞄を置き、なるべく土がつかないところを探して私は樹の影に隠れた。

もう春も半ばだけど、冬の冷たさの残る風が頬を掠めた。疲れてほてった体の私にはそのぐらいの冷たさが心地よかった。ふと下を見るとここはちょうど少し小高い丘のようなところだったようで、私がここまで来た道の全てが良く見える。

「うわー私あんなところから来たんだー」なんて考えていたら、いきなり光が美しい黄金色に変わり、私の見ていた景色が、さっき

まで見ていた景色とはまったく異なった美しい景色に変わっていた。
思わず息を呑んでしまう美しさに、そのまま時を忘れ少しの間風景をじっと見てしまっていた。その間にもう汗はすっかり乾いてしまって、さっきまでは心地よかった風に思わず身震いいしてしまう。
そろそろ行かないと、私のペースじゃ家につくころには多分闇がお日様が完全に食べてしまうだろうから。
そうして立ち上がろうとした時だった。

「あれー？見かけない人だぁ」

え？

男の子の声がどこからか聞こえてた。
多分見かけない人というのは、こんな田舎では私ぐらいしかいないだろうから、私に話しかけているのだと思い、周りを見渡すと少し離れたところに同い年ぐらいの男の子が一人立っていた。黄昏時のせいで余り顔は良く見えない。
男の子は、私の方へと歩み寄ってくる。近くに来ることで私も男の子の大体の容姿が分かるようになってきた。頭は寝癖か地毛かピョコピョコと無造作に髪がはねていて、大きめの目は少しつりあがっている。男の子は何か嬉しいことがあったのかどうかは分からないけれど、ニコニコと純粋で、さっきまで見ていた風景よりも綺麗な笑顔で笑っていた。目が合ったその瞬間に、心臓がトクンと高鳴った。

だって、黄金色の美しい光に包まれている男の子は、とても綺麗な瞳を持っていたのだから。

「ねぇ、もしかして君が引越ししてくる子？」
物珍しそうに男の子は私の顔をマジマジと見つめる。
「え…と、うん。そうだけど…？」
そう言った瞬間、さっきでも十分に眩しかった男の子の顔がパッと一段明るくなった。
「そうなんだ！！あ…そうだ！！名前言ってなかったよね？俺のことは愁（しゅう）って呼んで。中学2年生なんだ！！」
とろけそうな笑顔のまま、一気に喋りきり、私のほうへ手を差し出した。その意味が私には良く分からず何もせずにいると、愁は不思議そうな顔をして、
「…？どうしたの？握手嫌い？」
と、私に聞いてきた。それでようやく私は愁が何を求めているのかを理解し、アタフタと愁に手を差し出し、愁と握手をした。愁の手はすごく暖かかった。握手をしたら、愁は又嬉しそうにニコニコ笑いだし、その笑顔は私が見てきた人たちの中で、最も綺麗で純粋だった。
「あ…ねぇそういえば、君はなんていう名前なの？」
ん？…そういえば、私はまだ名乗って無かったんだった。
「あっと…私の名前は丘上　小椋、愁と同じ中学2年生です。」
愁と同じ様に簡潔に自己紹介をし、ペコリと、つい条件反射で軽い会釈《えしゃく》をしてしまった。
「え！？あ…あぁと、よろしくね！！」
私が愁に握手を求められたときのように愁もあわてて私と同じ様にペコリと頭を下げた。その姿が余りにも可愛くてついつい笑ってしまった。
「？？？」
愁は私を見て何故笑っているのか分からないといった風にしばらく首をかしげていたけど、すぐに私につられてか、私と同じ様に笑い

始めた。その瞬間はとても素敵で、輝いているように思えた。
しばらくそうして二人とも何が可笑しいのか笑いあっていると、
「ねぇ荷物持つよ？」
「え？」
愁に唐突に話しかけられ、素っ頓狂《すっとんきょう》の声をあげてしまった。
「荷物持つよって言ったんだけど…迷惑かなぁ？」
何を、勘違いしたのか愁が申し訳なさそうにショボンと小さくなってしまいったから、誤解を解こうと
「迷惑なんて思ってな「そっか。じゃ…」へ？」
迷惑なんて思ってない。私がそのせりふを言い終わる前に、愁は私の荷物を「おいしょ」といとも簡単に持ち上げてしまっていた。
「あ…ありがとう」
持ってくれるのだから、御礼ぐらい言わないとと思って咄嗟に出た言葉だったけれど、愁は優しくにっこり微笑んでくれた。それが、どうしようもなく嬉しくてしょうがなかった。

そのままなんやかんやで、家まで送ってもらいました。

愁。そう名乗った男の子は、とても綺麗な瞳で笑う人だった。愁の笑顔を思い出すと、頬が緩み安心してしまう。会ったときからず

っと、心臓が今までに無いくらい早く脈を打っているけれど、それすら心地よく感じる。

私は一体どうしてしまんだろう。こんな事今まで一度だって無かったのに。

黄金の出会い（後書き）

丘上　小椋

亜麻色の肩まで届かないぐらい短い髪を持っている。
髪の毛ふわふわ。
お母さんの治療の為医者に進められて越してきた。
元々お母さんが一人で住む予定だったけれど、お母さんの病症が良くなったので、今回一緒に住むことになった。
注　1話現在ではの設定です。

文章力無い上に説明下手のせいで、訳が分からなかった人もたくさんいると思うので…一応補足です。
誤字脱字、他ここらへんが良く分からない、ここはこうした方が良いというところがあれば、ご指摘お願いします。

散策（前書き）

今回は、学生には基本の学校の説明。
文章ばかりです。

散策

「え～っと、ここが図書室っと…」

少し古びた扉を開け、そっと中を覗いてみる。

中は綺麗に整頓されていて、中々使い勝手がよさそうな内装になっていた。それだけを見て、私は扉を閉め、歩くたびにギィギィと音が鳴る木の板の廊下を進んでいく。

私が今何をしているのか。焦らすのもアレなので答えをいうと、今は明日から通うことになる学校に校内散策をしている途中。

この学校は、幼稚園から中学校までを合わせたところですが、過疎化等の問題もあり、（幼稚園組みで１つの教室を使い、小学生組みは２つ中学生組みは１つの教室。）幼稚園（３歳から）からだと、中学生までというのはかなり長いと思うのですが、４っしか使わないらしいんです。そのせいで私は、学校はかなり小さいところかと思っていたのですが、けれど意外や意外。校舎は全３階建てで、全体像がつかみにくい程大きく、元々は長屋だったものを無理やり改築し学校にしたらしいのですが、さすがにでかすぎじゃない？（というより本当に長屋だったの？）にしても、さすがに無理やり工事したのは本当なんだろうなぁ。とは思います。

ちょっと注意深く見渡せば所々長屋（？）だったころの名残がありますし、人が住めそうな感じがあります。というわけで、簡潔にまとめますと、この学校は少し懐かしい雰囲気（お化けが出そうな雰囲気も）がある（馬鹿みたいに）大きい木造建築の学校です。（もしかして部屋が大きすぎるから教室４っしかないのかな…？）

さて、本題に戻しますが、何故私が一人で学校探索をしているのかというと、引越しの準備が完了し、２日ほどたった頃、先生から電話がかかってきて、今日中に一通りの学校の地図を頭に叩き込ん

でおくように言われたので特別に先生から鍵と校内見取り図を借り、私は一人で校内散策しているのです。
一人で誰もいない（し、知らない）校舎を歩くと言うのはかなり寂しく（というよりは怖い）、気を紛らわそうと廊下に花壇があるのを見つけ、「うわ～綺麗～」なんて独り言を呟いたり。
そういうことを２０分もやっていると、そろそろちゃんと校内散策をしようという気になり、手元の先生お手製地図（最近はお手製がはやっているたりするの？）を見るものの、何が何階の何番目の部屋にあるか箇条書きで書いてあるだけでかなーり味気ない。しかも、ざっと見ただけで何十とある部屋の中で両の手で数えられるほどの部屋の説明しか書いておらず、先生の言い訳としてはこの校舎は無駄に広いだけであまり使われていない部屋が大半で先生も教室や職員室等以外の場所は把握しきれていない（というより行ったことが無い）ので無駄に見取り図を描くより箇条書きにしたほうが良いだろうと言う事なのですが、さすがに味気なさ過ぎるんじゃないでしょうか。

まぁ、それでもたまに迷いつつ、なんとか一通りの道筋を覚え、最後に一番使うことになるであろう教室に向かいます。
「ここか…」
（色んな場所をめぐってきて思ったんだけど、やっぱり部屋広すぎるから４っしか教室使わないんだよね…多分（何人いるのかは知らないけどさ。））
そんな事を考えながら、扉に手をかけた、その瞬間。

「え？」

扉が勝手に開いた。

「きゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

驚きの余り、私は校舎中に響いたであろう大声をあげてしまったのでした。

散策（後書き）

いかがでしたでしょうか？
更新ペースが遅く、申し訳ありません。
精進いたします。

再開（前書き）

まさか、クリスマスイブとクリスマスに小説を投稿することになろうとは…

再開

思いっきり叫び声をあげて少し落ち着いてきた頃、恐る恐る目を開けて良く見てみると、同い年ぐらいの男の子が、私の悲鳴のせいか驚いたままの表情で固まっていてる。
「ご…ごめんなさ…ってあれ…？もしかして愁？！」
そう。目の前にいたのは愁だった。
「うぇ？あ…小椋！？」
名前を呼ばれたことで、意識が戻ったのか、さっきも十分に驚いた顔をしていた愁が、さらに目を見開いた。そして何秒か私を良く見た後
「なんだービックリしちゃったよー！！小椋だったんだぁ。」
私だという事が確認できたのか、いきなりパッと花が咲くような笑顔を向けらた。
その瞬間。またあの時のように心臓がトクンと高鳴った。
「でも、小椋が何でここに？」
「あーうん。私は先生に言われて校内散策に来てて…愁は？どうしてここに？」
「えーーっと、あはは。宿題忘れちゃってたから、取りに来てたんだ。」
「あ、そうだったんだ。」
「うん。あ、そうだ！！ねぇ小椋。もうすぐ校内散策って終わる？」
「…？うん。この教室覗いて帰ろうと思ってたんだけど…」
「そっかぁーじゃあ大丈夫だね？俺の家に遊びに来ない？」
「うん。分かったー何時にー？…って、えええええええ！？」
「じゃあ、校内散策終わったらすぐ行こうよ俺の家！！たまたま、今日俺の友達も遊びに来てるしね！！ちょうど良いから紹介するよ！！」
「えええええええええ！？いや、だから、ちょっまっ…」

「じゃあ、早く終わらして俺ん家行こう！！俺自転車で来たから俺ん家まですぐだよ！！小椋２人乗りできる？」
「あ、うん。２人乗りぐらいは出来るけど…じゃなくて！！」
「じゃあ決まりだね！！早く教室の中見てみて！！」
「えぇぇぇ。だから！！！」
　愁は私のいう事など聞こえていないのか、グイグイと私を教室の中に入れる。想像通り教室は広く、多分５０人程度なら一つの教室に入りきるほどの大きさ。おかしいだろう。何でそんなに広いのか。
「ねぇねぇ。そろそろ行こう？」
　しばらく、この教室の（多分）無意味な広さにあっけにとられていると、愁が待ちきれなくなったのか、私の袖を引っ張り、行こう行こうと催促してくる。
「ね？」っと、とびきりの笑顔で言われ、「分かったよぉ…」と私は何故か愁の家にいけるのを喜んでいたけど、それを外に出さないよう必死に取り付くりながら、返事をした。

　そのまま愁に手を引かれ（いきなり手をつかまれて凄く驚いた。）、愁の自転車に乗った。愁の腰に手を回して、顔を背中にうずめた。愁はくすぐったそうな表情なったけど、何も言わず漕ぎ出した。
　自転車に乗ると、風を嫌というほど感るけれど、愁の後ろにいるからか、風を余り感じなかった。
　二人特に話すことなく、愁はただ自転車をこぎ、私は愁の体温を感じていた。
　いつもならば、会話が全く無いというのは重苦しく、いたたまれない気分になるけれど、今回は、とても穏やかで、それをとても嬉しく感じている。

そうしている間に、愁の家についた。

再開（後書き）

タイトルどおり、今回は愁と再会したってだけの話です

友達（前書き）

今回は、この物語に深く関わっていく人達紹介。

友達

「さ、入って入って！！」
愁の家に着くなり、愁に急かされ、玄関でのお邪魔しますの声は、急いで歩いく足音でかき消された。
「ここが俺の部屋だよー」
そう言ってついたのは、二階にある、一番奥の部屋。
友達がいるといっていたけれど、一体何人ほどいるのだろうか。
「たっだいまーー！！」
愁が、扉を開けた。

「遅い。宿題取りに行くのに、時間か…かり…す……ぎ？」
部屋の中にいたのは、三人で、一人は女の子。二人は男の子で、大体皆同い年ぐらいに見える。
今喋ったのは、女の子で、黒い髪を綺麗にポニーテールで束ねてある。
「誰？その子。」
率直な疑問を投げかけられる。
「あのね、この子は小椋ちゃんって言うんだよ！！転校生なんだよ！！」
愁ニコニコと笑顔のまま簡単に私の説明をする。
「あ…えと、こんにちは。丘上　小椋っていいます。中学2年生です。」
愁に始めてあったときのように、軽くお辞儀をする。すると、蜂蜜色の綺麗な髪を持った男の子が、「丘上…さくら…」私の名前を、小さく呟いて、しばらく考えるようなそぶりを見せる。そして、おもむろに近くにあった鞄から紙とシャーペンを取り出すと、小椋。

と私の名前の漢字を書く。
…珍しいな。私の名前を、そっちの漢字だって考えられる人。
「なぁ、この…これで『さくら』って読むんだよな。」
コクリと小さくうなずく。他の愁やポニーテールの女の子、そして、さっきまで携帯ゲーム機でピコピコ遊んでいた子も、男の子を不思議そうな顔で見ている。
「小椋。俺に見覚えないか？俺の名前晃（こう）って言うんだけど…」
そういわれて、晃を良く見てみるが、全く思い出せない。
「幼稚園のとき…引っ越していってさ…」
…蜂蜜色の髪の、引越しいていった男の子……。
「……、もしかして、鈴本…？」
記憶の中のおぼろげな部分で、その名前が出てきた。
「…！！！思いだしてくれたか！！っていっても、今は違う苗字なんだけどな。」
ははは…と目の前で笑っている晃との記憶は、とてもおぼろげで、昔話が出来ないぐらいには覚えていないのだけれど。
…『苗字が違う』。もしかして、またお父さんが変わったのだろうか…私の記憶上では、確か鈴本は、２番目のお父さんの苗字だと聞いたけど。そんな事を考えているうち、
「あんた一人で、喋りすぎ。こっちはぜんぜん読み込めてないんだけど。」
ポニーテールの女の子が、晃に話しかけた。隣では愁も、そのこと同じ様な顔をして私を見ていた。
「えーーっと、あれだよ。俺と小椋は、おんなじ幼稚園に通ってた知り合いなんだよ。」
晃が簡単に説明する。大体の経緯が飲み込めたのかポニーテールの女の子は、なるほどね。と呟いた。
「じゃあ、次は私達の、自己紹介をするとしましょう。」
ポニーテールの女の子は改めて私に向き直った。
「私の名前は、海棠（かいどう）　天花（あまか）。貴方と同じ中学二年生。こっちの、ゲ

ームしている方は安藤（あんどう）　真也（しんや）。同じく中学二年生よ。」
　天花と名乗った女の子は、それだけ言うと、またもとの姿勢に戻った。真也君は、ゲームの画面に集中している。その横を天花ちゃんが、寄り添うように座っている。
「これが俺の友達だよ。皆仲良くしよーねぇー。」
　愁はにこっと笑うと、私に座るよう促した。実を言うとさっきから、ずっと立っていたので、少々足が痛かったので、とても助かった。

「今日は楽しかったね。」
　それはもう、皆帰った後、愁がにこりと私に笑いかけながら言った。
「うん。誘ってくれてありがとう。」
　私は素直にお礼を返す。
「小椋が学校来たときにはもーーーっと、いろんな人紹介するからね！！」
「うん。楽しみにしてるね。」
　そう言って、私は愁の家を出た。

「お母さんごめんね。遅くなっちゃった。」
「　　」
「ふふふ。今日はね、友達がたくさん出来たんだぁー」
「　　」
「明日から学校だから今日は早めに寝るね」

「　　」
「おやすみなさい。お母さん」
もう声は聞こえなかなった。

登校（前書き）

初めての登校。転校した事が無いので、始めの緊張感等、表現不足が目立ちますが、お許しください。

登校

そして、私が学校に登校する日がやってきた。
「丘上　小椋と言います。よろしくお願いします。」
もう何度目だろうか。自己紹介の後に私は頭を軽く下げる。
拍手がちらほらと教室で鳴る。大体の人は、物珍しそうに私のことを見ているだけだ。
先生が事務的に私の転入式を締めくくろうとしている。
そんな中、一つの声が、教室中に響き渡る。
「小椋！！今日からだったんだね！！」
そう。愁の声。私は声も出さず、ただ頭を縦に大きく振ることで返事とする。すると愁は
「ねぇ先生！！小椋は俺の友達なんだ！！ねぇ俺の隣り合いてるし、小椋。座ってもいいよね？」
そう言った。
先生は面倒くさそうに私に軽く確認のような質問を投げかけると、そのまま私を愁の隣の席に座らせた。
愁はニコニコと嬉しそうに笑っている。
愁の前には、天花ちゃんと真也君。私と愁の後ろにはＨＲにもかかわらず、朝から寝ている晃。
他にも、多分同じ学年だと思われる人達がいる。
チラチラとこちらを見ている様子から、こちらに興味があるものの、話しかけても良いものか判別してるのだろうという印象を受ける。
「小椋！！」
「ん！？どうしたの？愁」
一瞬驚いてしまったが、愁にとっては些細なことなのか、スルーして話し始める。
「あのね、あのね。前も言ったとおり、俺の友達を紹介しようと思ってるんだけど…良いかな？」

特に断る理由も見つからない私は「うん。」とだけ、返事をした。

そうして一日が過ぎた。優しくて温かい一日だった。
五人で勉強して、お弁当を食べて、休み時間は馬鹿みたいにはしゃぎあって。
愁をそっと盗み見ると、相変わらず笑っていて。
その笑顔を見ると私も自然に笑顔になる。
それが何故なのか、今の私には理解できない。だけどきっとそれは、とても優しくて綺麗で温かいもの。
だって、この気持ちを味わってから、世界が眩しくて、素敵に見える。愁といれば、世界が変わる。優しくて、私を傷つけない。全てを忘れて、何かに浸ることが出来る。
だからきっと、素晴らしいもの。今はまだ、その正体を知らなくていい。

たった一日。
短くて儚い。だけど、こんなにも愛しく、過ぎていくことを悔やんだ一日が私は今まで無かった。
学校が終わって、「バイバイ」そういって、別れてまた明日。それなのに、また明日も、続くのに「バイバイ」と言って別れるのが、とても嫌だった。
そんな一日。ねぇ神様。この『幸せ』は、いつまで続きますか？
永遠とも思えるほど、噛み締めて、喜びを体中で感じられるほど続きますか？
この『幸せ』が『日常』になるまで、私は

「ねぇ、お母さん。今日も私はとっても幸せだったよ」

私は今日もお母さんに話しかける。
「　　」
「愁と会ってから、凄く凄く幸せ。愁に感謝しないと駄目だね」
クスリ。そっと私は笑う。机越しに座っているお母さんの顔は私には見えない。
「　　」
「お母さん。早く病気治るといいね？」
「　　」
「おやすみなさい。お母さん」
もう声は聞こえなかった。

登校（後書き）

友達紹介の所が抜けていますが、気にしないでください^^

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8294x/

レインリリー

2012年1月7日12時45分発行